

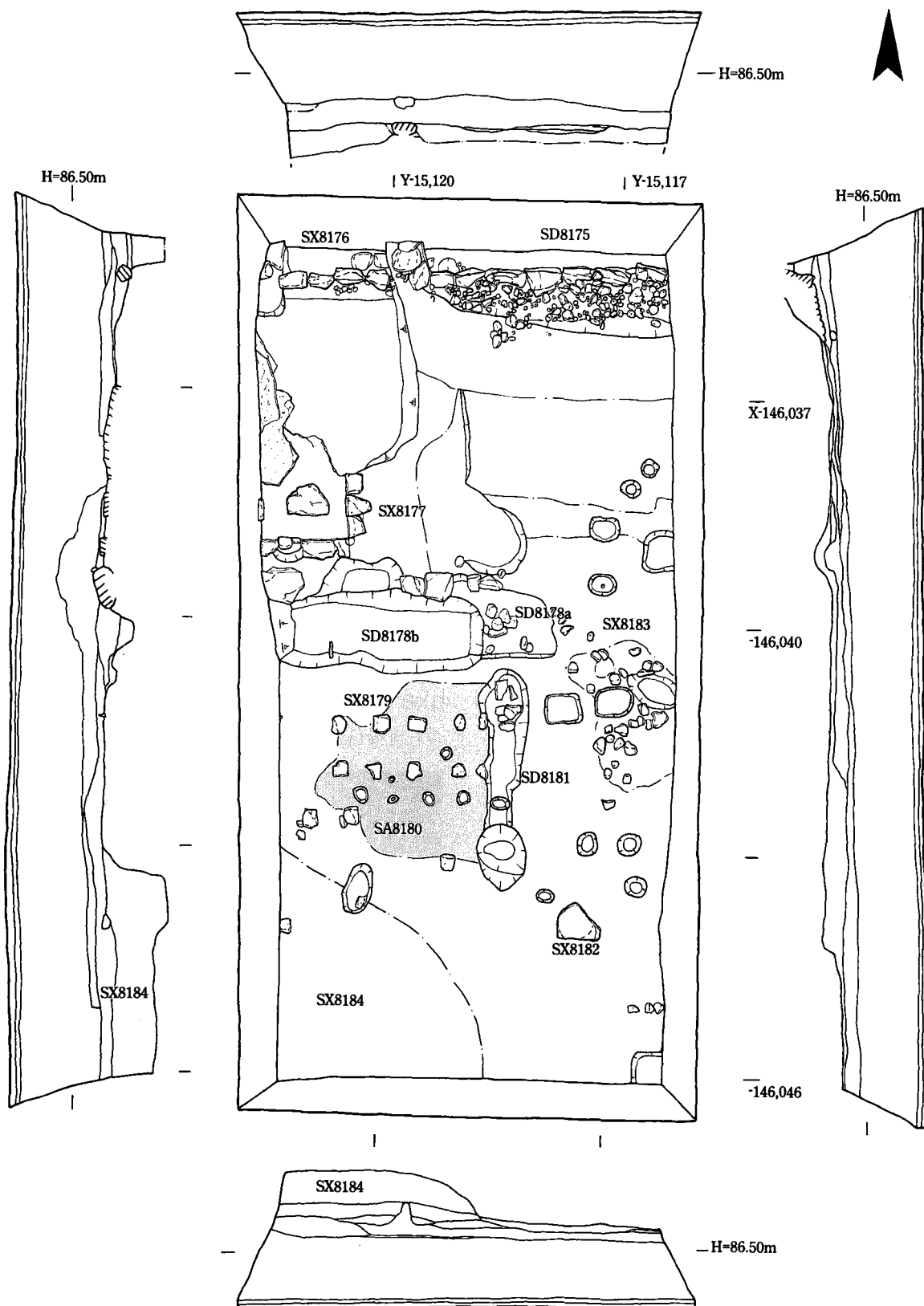


図141 第327次調査遺構平面図・断面図 1:80

埋土の上層には近代以降の遺物を含むが、奈良女子大学構内で検出された、奈良奉行所北面の濠SD2780の北岸にみられる護岸SX2808の構造に類似することから、この護岸自体は近世にさかのぼる可能性がある（奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ』1984）。

SX8176 SD8175の西側で東西1.5m分検出した枡状の石組み。SD8175同様の塊石をコ字形に組み、境にはさらに粘土を充填する。裏込は用いない。埋土中は無遺物で上面には漆喰が置かれていた（図143）。

SX8177 調査区中央西辺で検出した近代の水場。西側は調査区外へのび、南半は攪乱を受けているため、東南部にあたる内法東西2.1m、南北2.4m分を検出したにとどまる。周囲には内側に面を揃えて石を配し、漆喰で水平面をつくる。漆喰面の中央には足場のために一辺55cmの大型の石を上面を水平に埋め込む。この水場の西方には現在も使用可能な井戸があり、この井戸にともなうものであることが推定される。なお、外周の整地土上面から昭和24年発行の1円黄銅貨が出土した。

SD8178 調査区中央で検出した東西方向の素掘溝。幅65cm、深さ20cmで、東半部は礫を多量に含む黄褐色土により埋められている（SD8178a）。西半の2.8m分は、幅1m、深さ50cmに再掘削され、北肩に1辺30cm～50cmの

塊石を護岸状に据えている（SD8178b）。南肩には丸木杭が打たれていた。埋土は上下2層に分かれ、上層の黒色土からは、瓦、陶磁器、および貝殻などの食物残滓を含む多量の遺物が出土した。下層の橙褐色砂質土は、無遺物層である。

SX8179 調査区南端から北へ5m程のところで東西方向に黄褐色土の高まりが認められ、その中に一部埋没した状態で検出した石列（図142）。東西方向に5基2列にわたり20cm四方の平石を10基配列する。間隔は東西に50cm等間で東端のみ30cm、南北は60cm。東端の2石はSD8181の西肩にかかる。同様の石を、南西に外れた位置に2基、南に1基検出したが、筋が揃わないことから、二次的な移動を受けた可能性がある。

SA8180 東西方向の柱穴列。径20cm前後の小柱穴を45cm間隔で5基4間分検出した。東端の穴はSD8181の埋土を掘込む。

SD8181 長さ2.9m、幅50cm、深さ10cm程の浅い南北方向の素掘溝で、両端は土坑状に広がる。北端では平瓦の破片が充填されていた。近世後半の瓦を含む。

SX8182 長辺50cmほどの礎石状の石。

SX8183 調査区中央東辺で認められた礫、漆喰塊を含む黄褐色土の集中。



図142 SD8179・SD8181・SD8178検出状況（東から）

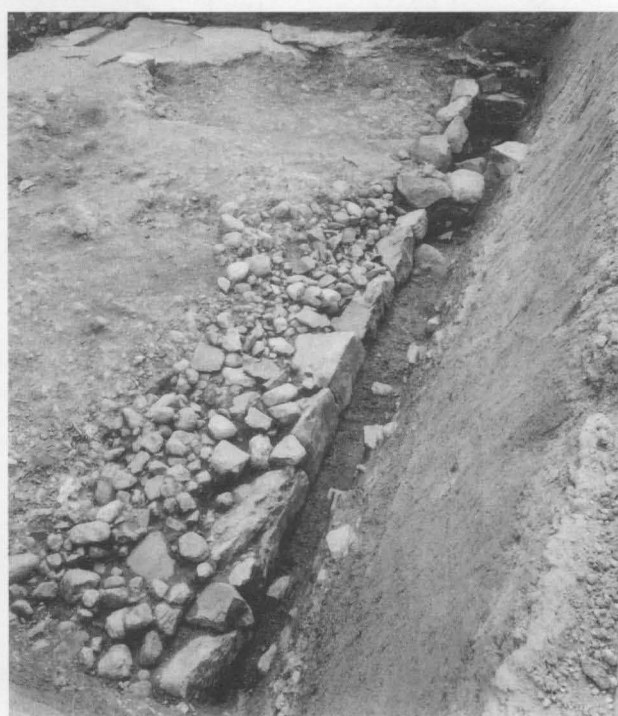


図143 SD8175・SX8176検出状況（東から）

SX8184 調査区西南隅で確認した落ち込み。深さ70cm。橙褐色砂質土により埋め立てられており、埋土から近世の瓦と土器が出土した。

4 出土遺物

遺物は、SD8175、SD8178b埋土、および遺物包含層である黒色土を中心に出土した。また、調査区北半は、地山が緩やかに北に傾斜するが、客土以前に全体を水平にするための盛土が行われており、この盛土（暗褐色土）中からも少なからぬ遺物の出土をみた。これらは二次的なものと考えられる。出土遺物には、瓦磚類、土器・陶磁器、金属製品、銭貨、貝殻などがある。瓦磚は、表20のとおりであるが、中世から近世にいたる時期のものが出土している。土器・陶磁器は、整理用コンテナ1箱分が出土した。貝殻はSD8178bから多数出土し、この溝が生活廃棄物の塵芥処理に使われたことが伺われる。

5 まとめ

今回の調査で確認した遺構は、以下のように大きく整理することができる。

調査区西半では、南からSA8180、SD8178b、SX8177およびSX8176が南北にならび、調査区外の井戸も含め、一連の遺構として機能していたものと考えられる。時期は近現代で、駐車場造成直前までであろう。

一方、石列SX8179は、規則的に配置され上面が平坦になるように据えてあることから、何らかの構築物の基礎であった可能性が想定できる。地山上に高まりとして残された黄褐色土中に埋もれていたこと、東方に礫、漆喰の集中するSX8183が存在し、SD8178aも同様の土で埋め立てられていることなどの状況から、SX8179の位置に土塀状の施設があり、これら一群の混礫黄褐色土はその崩壊土である可能性がある。この場合、SD8181は土塀にともなう瓦組暗渠の抜取跡とも考えられる。すなわち、区画塀SX8179、その暗渠SD8181、北側の区画溝SD8178aという関係があったものと想定でき、これらが近世の興福寺、あるいは大持院北辺に関わる遺構であった可能性がある。ただし、通常土塀の基底部は基底部幅に沿って外側に面を揃えた2条の直線的な石列として検出される場合が多く、SX8179の性格についてはなお検討の余地を残す。

表20 第327次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦	
型式	点数	型式	点数
9280	1	近世	9
中世	1	軒棧瓦	1
近世	5		
近世巴	4		
菊丸	1		
軒丸瓦計	12	軒平瓦計	10

丸瓦	平瓦	碓他	道具瓦
重量	12.0kg	118.0kg	6.2kg
点数	128	1475	6

調査区北端で検出した東西溝SD8175は、現在の登大路町と油留木町の境界に位置し、本来は町境を画する溝であった可能性が高い。油留木町は、二条大路にそって東西二丁にわたる街であり、その南半はもとの二条大路上に位置する。興福寺北辺付近の二条大路は、自然の傾斜地を開削して通したことが推定されている（大岡實「平城京と興福寺の寺地」『佛教藝術』40 1959）。調査地の南西に位置する奈良県文化会館北側の崖線が、二条大路南辺の名残であろう。このような周辺の地物との位置関係からみると、SD8175が二条大路の南側溝を何らかの形で踏襲している可能性は高い。

今回の調査では、中世以前にさかのぼる遺構は確認していない。また近代以降の改変が大きく、近世以降の遺構についてもその性格づけは難しいが、上述のようにSX8179とSD8175の位置関係は、興福寺北辺と二条大路の関係を探るうえでの手がかりとなろう。（次山 淳）

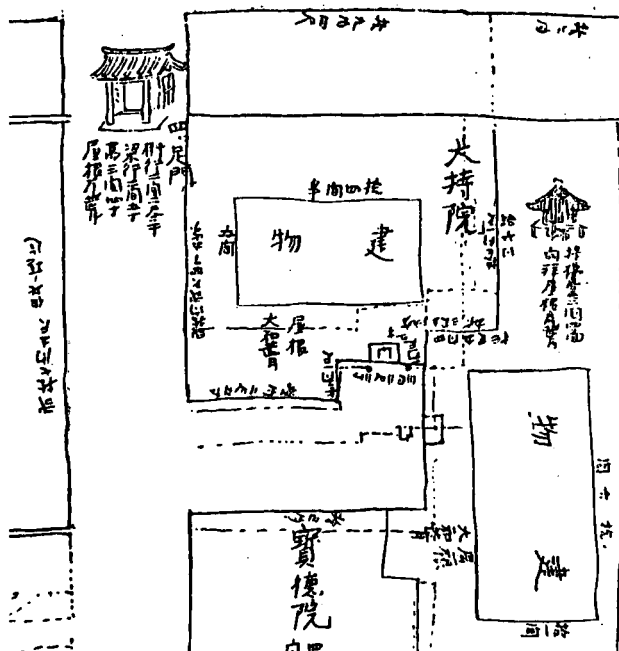


図144 『興福寺春日社境内絵図』部分
（大岡實『興福寺建築論（上）』『建築雑誌』第42輯第505号 1928より）